
レイ

今西 克己

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイ

【Nコード】

N2248T

【作者名】

今西 克己

【あらすじ】

雨の日に出会ったどこかで見たことのある美少女。彼女とプラトニックにつき合つが実は彼女は……。。

曇のち雨、降水確率午後は80%、いつでも雨粒を地面に叩きつけますよとばかりに黒い雲が空を覆って太陽の光を遮っている。出社をするため徒歩で駅に足を進め、着いたときは案の定ほとんどの人が傘を持っていた。

ただ一人、色白の黒髪をなびかせている女子高生が傘を持たずにプラットフォームに立っていたが試験が午前中で終わるのだろう。

レールの上を滑り徐々に減速をして白線に寸分違わず止まった満員電車に真田はいつもどおり強引に乗り込んだ。

午後六時半、仕事が終わりに駅につく、帰りの駅に入る前から結構降っていた雨は一段とひどく激しくなっておりアスファルトでバウンドしている。傘を開き駅を出ていざ帰宅しようとして雨避けしていた駅の軒下から一步踏み出そうとしたとき一人の少女が視界の端に映りこんだ。

朝、傘を持っていなかった女子高生の娘だ。可愛らしさがありつつ大人びた雰囲気を持ったスタイルの良い娘だったので覚えている。

試験じゃなかったんだな、どうして傘を持たずに来たのだろう。

真田は不思議に思いながらも彼女のもとへ駆け寄った。

「傘は持ってこなかったの？」

真田は少女に声をかける。

「ええ……」

真田に視線を合わせずまっすぐに前を見たまま気のない返事をする。怪しいおじさんとでも思われたのか。

「いや、変なつもりはないから」

その言葉を発することが変であるのだが……。

「……んふふ」

笑いながら少女は身体をなめらかに四分の一回転し真田に正対する。長い髪がふわりとなびきい匂いが真田の鼻腔を刺激する。

間近に見る彼女は肌のきめが細かく綺麗で、まつ毛が長く艶治な瞳を輝かせながらも幼さを残している。その下に視線を移すと制服の上からでも存分に自己主張をしている膨らみがある。確実に妻よりも豊満だ。自分の視線に気付かれないように真田は視線を彼女の身体から避けた。

「この傘を使いなよ」

そういつて真田は右手に持っている黒い傘を渡そうとする。

「遠慮いたしますわ。あなたが濡れてしまいますもの。忘れた私が悪いんですのから」

断るうら若き少女に

「これがあるからいいさ」と真田はバックから折りたたみ傘をだして微笑みかけた。

「なっ、これなら遠慮しなくていいだろう」

そういわれた少女は真田に大きな黒目を向けてにつこりと微笑む。

「それなら遠慮無く使わせていただきますわ。わたくしは篠崎レイと申します。それで……あの、よろしければあなたの名前を伺いたいのですが？」

透き通ったきれいな声だ。

「僕は真田健治といいます。普通のさなだに健康の健に治安の治」

「わかりましたわ。では携帯番号も教えていただきたいですわ」

嫁に知られたらやばいよなと真田は一刹那ためらった。

「どうされましたの？傘を返すためには必要な情報ですわ」

そ……そうだよな。やましくない、やましくない……。

真田は少女の言葉に心を緩め携帯電話の番号を教えた。すぐさま彼女はその番号を自分の携帯に打ち込む。

トウールルルルルルルルル……ボレロの着信音になった。

真田は携帯の画面を見ると登録してない番号だ。

「それがわたくしの番号ですわ」

隣のレイが言う。そしてまもなく着信音が止まった。

「登録してくださいさらないの？」

真田の携帯をのぞき込みながらレイは言う。

「……うん」

真田は『しのぎき』と打ち込み変換をする。

「その字ですわ」

とレイが教えてくれる。

「あら、苗字だけですか？」

登録ボタンを押したあとレイが訊いてきた。

「レイの字がわからないしね。それに同じ苗字の人は他にいないから覚えられるよ」

名前まで入れて、もし妻に見られたらまずいことになる真田は苗字だけ登録しとこうと考えていた。

「そうですか……」

レイは長いまつ毛を雨ざらしのアスファルトに向ける。

真田はまつ毛の奥の寂しげな少女の目を視界に捉えると得も知れぬ罪悪感が腰から背中を伝い頭まで届き脳が少女の名前を訊けと命令する。レイの字を少女に聞いて登録をし直した。

「優しいんですね」

彼女は若々しい笑みを浮かべる。妻と違い表情を戻しても口角に皺は残らない。

「僕の心の半分は優しさで出来ているからね」

市販薬のCMのようなセリフを言ったが少女には伝わらず。小首を傾げられた。サラサラとした髪が揺れ、いい匂いが真田の鼻にまた届く。このまま並んでいたら男としての欲望がもたげてきそうである。

「じゃあ、さよなら」

危ない気を起こさないうちに逃げるように去ろうとした時、目の

前でクラクションが鳴った。

「あっ！」

セダンの車に乗っている妻である恵美の姿がそこにあった。いつから居たのだろうか。やましいことはしていないが心はかすかにむずかゆい。思い切りつくり笑いをしてから

「ありがとう。気の利いた嫁さんを持ってしあわせだな」

と言いながら助手席に乗り込む。

「あら、どうも」

明らかに不機嫌そうでそれを隠そうともしない。

「気分でも悪いのか」

「ええ、とつても」

これは怒っている。朝帰りの時並みに怒っている。

「美少女ね」

レイとの一部始終を見ていたのか。しばらく嫌な沈黙が二人の空間を包み込む。

「あの子は妹の友人で篠崎さんと言っただよ」

その空気に耐えられず真田はしょうもない嘘を付いた。幸い妹は女子高生であるのは事実でなので矛盾はない。

「そう、あなた随分デレデレしていたわよ。警察がいなくてよかったわね」

真田の方を一瞥もせず悪意のこもった物言いをする。

「どうしてだよ。俺はなんにもしてないだろう。警察ってなんだよ」

「条例に引つかかるんじゃないかしらね」

未成年に対する淫行条例のことか。

「だから俺はなんにもしてないから。妻なら信用しろよ
強めな言葉だが弱気という。」

「信用ねえ。そうねえ、じゃあキスをしてよ」

「キ……キスって！　ここでか？」

「そうよ。いますぐしてよ」

上半身をひねり首をわずかに曲げ、まっすぐにフロントガラスを見つめていた視線を真田に向けてから目を瞑り薄く口紅を塗った唇をすぼめる。いつも大人しく清楚な妻が車内とはいえ家の外で自分への愛情表現を求めてくるのは初めてのことである。

「な、何を言い出すんだ。今日のお前はなんかおかしいぞ」

「おかしい？ その原因を作ったのは誰かしら」

「だから何を疑っているんだ。俺が浮気でもすると思っっているのか？ あの娘は妹の友人なんだぞ」

「妹さんの友人だからどうと言うのかしら。そんな理由じゃ浮気の可能性は否定出来ないわね」

「馬鹿な事を言つなよ。どうしろというんだ？」

「キスしてって言ってるじゃない」

一向に表情と厳しい口調が変わらない恵美の疑念を晴らすためには口付けをするしかなさそうだ。一瞬だけレイの居た場所に目をやるとまだ傘を持ったままで帰っておらずこちらの様子を眺めている。

「わかったよ」

真田はそう言っただけで恵美の首に左手を回し右手は優しく後頭部に触れ、その右手を自分の方に寄せて口付けをした。恵美の視線はレイを向いている。

「これでいいだろ」

「ええ」

依然として硬い表情を崩すことはないが言葉では納得の意を示しシフトレバーを操作し車を発進させる。振り返るとレイは去っていた。

その晩、珍しく恵美から閨の誘いをかけてきた。真田はそれに応じて彼女を抱く。いつもと違い恵美はねっとりとした情熱的に真田の感じる部分を責めてくる。結婚して三年、性に対して淡泊だと思っていた恵美が避妊具を使うことを断り、しつこく真田の身体を求めその体内に精液を受け止める。子供を作ることに消極的だった彼女は

考えが変わったようだ。

翌朝

新婚時代以来の寝不足に加えて加齢による体力の衰えで回復しきれない気怠い身体を引きずり、機嫌よく妻が作った栄養たっぷりの朝食を胃に蓄え真田が駅へと歩いてしていると

「真田さん。おはようございます」と昨日初めて聞いた声が後方から耳に届く。

振り返るとレイが真田のもとに駆けてきている。

「おはよう」

隣に並んだレイに真田も挨拶を返す。

「昨日はありがとうございました」

「どういたしまして」

昨日貸した傘を受け取り、そのまま並んで一緒にホームまで歩く。

「あの、昨日の女性は奥さんですか？」

顔を赤らめて訊いてくる。昨日の口付けを恐らくは見られているので真田としても気不味い。

「うん、 そうだよ」

素っ気なく意識してませんよという口調で彼女の質問に答えた。

「そうですか、きれいな方ですね」

「ありがとうございます。妻にいつておくよ」

「言わないほうがいいですわ」

「どうして？」

「わたくしはきつと奥様に嫌われていますわ」

「妻と君は話したこともないじゃないか。好きも嫌いもないよ」

真田は妻がレイのことを心良くは思っていないのは昨日の彼女の前で口付けをねだったことで気づいてはいる。妻はレイを少女ではなく一人の女として認識をしているのだろう。

「そつえば君はいつもこの駅を利用しているの？」

「ええ、三ヶ月前にこちらに来てからそうですわ」

真田は昨日レイを初めて見た。こんな可愛い少女なら一見だけでも覚えていそうなものだが全く記憶にはない。

「それなら携帯は教えなくても良かったのかな。こうして会えるのし」

「嫌なんですか？」

「何が？」

「わたくしに携帯番号を教えたこと」

「そんな訳ないじゃない。こんなきれいな少女と携帯番号交換できただからね」

「ほんとに！お世辞でも嬉しいわ」

レイは眩しいほどの笑をうかべた。色白の顔が太陽を浴びてオーラのように薄く光を帯びている。

「嬉しいのなら、メルアドもおしえてくれますよね」

寸陰、真田は思考を張り巡らせた。これは妻の許容範囲を越えるだろう。携帯番号を交換していることすら恵美に知られたら憤怒されそうだからこれは踏みとどまるのが賢明ではないかな。

「それは遠慮するよ」

「まあ、いいですね。ショートメールは送れますからそれで我慢します」

「ショートメールって」

「だってわたくしと真田さんは同じキャリアの携帯ですよ」
ものすごく単純なことに真田は気がまわっていなかった。

二人雑談を交わしているうちにプラットホームに着いた。乗る電車の方向は別々だ。

まもなくレイの電車が先にプラットホームに到着した。お互いに軽く手を振ると周りのおっさん達が嫉妬の目を向けている。

「さあ、今日もがんばるぞ」

レイに会って会話を交わしたら真田は昨日の言みの疲れなど吹き飛んでした。ただし、腰は少々痛い。

レイの笑顔を思い浮かべながら仕事をこなしていると、あつという間に昼休みの時間が訪れた。真田は妻お手製の弁当を屋上のベロンチで食べてながら携帯の着信を確認してみるとレイからのメールが入っていた。

【真田さんお仕事がんばってますか？ わたくしは調理実習で良かったです。今日はサンドウィッチを作りました。よろしかったら食べていただけますか？】

調理実習か、懐かしいな。真田はニヤニヤする自分を抑えることは出来ない。

【今日は7時頃駅につきそうだけどいいかな】
とメールを返す。
すると3分も経たずに

【では駅で会いましょう。一度家にかえって着替えてきます】
とメールが帰ってきた。

「女子高生の作ったサンドウィッチか……」
真田はつぶやく。そして弁当を掻きこみ午後の仕事に向かうべく所属部署に帰る。レイに関わるとなぜだか気力が無限に溢れ出る不思議な感覚を得る。

「真田、元気そうだな。ニヤついてないか？」
同僚が声をかける。朝も別の同僚に言われた。

「そうか？ 気のせいだろ。俺はごく普通のしがないサラリーマン」
真田は面白くもない軽口たたたく。どう見ても浮かれている。美少女女子高生の作ったサンドウィッチが食べられると知ったら同僚たちはどんな反応をするだろうな。胸のうちに閉まっておきますけどね。

午後の真田は午前よりもさらに脳が覚醒したかの如くサクサクと仕事をこなし今日のノルマとしていた社内文書の作成をあっさりと片付ける。課長からは訂正箇所なしの一発OKをもらい後はアルバイトの学生にコピーを任せればいいのだが、それまでも自分でこ

なした。そして定時の五時になると「お疲れ様でした」と軽い足取りで帰路に着く。

寄り道をすることなく電車に乗ると五時四十分過ぎに駅についた。レイとの約束の時間にはまだ一時間以上ある。さて余った時間をどうするものかと思っていたが反対側の電車からレイが降りてきた。

なんとという偶然。もしかしてレイとは運命の糸で繋がっているのかな。なんて不貞な言葉を頭の中で真田が浮かべているとレイも真田にすぐさま気付いた。

「真田さん」

レイは手を振り寄ってきて真田に腕を組んでくる。それを解くのは野暮なことだと真田はレイのなすがままにして何も言わない。これは客観的に見て恋人同士だよな。と優越感に浸る。正直に言うとレイが可愛くて仕方がない。

学校での出来事や先生の悪口などの他愛も無い会話を交わし駅を出る。

「サンドウィッチどこで食べましょうか？」

上目遣いでレイが訊いてくる。真田はこの娘をどこかで見た気がするのだがそれがどこなのか思い起こせない。

「そうだね公園のベンチでいいかな。失礼かな？」

「わたくしは構いませんわ」

「そう。じゃあそうしようか」

駅から徒歩三分くらいのマンション群のなかに昼間は主婦たちが集い、夕方からは放課後の小学生が遊ぶコート、芝生や植樹、幼児施設が豊富に揃っている大きな公園がある。二人は腕を組んだままそこへと行くことに決めた。

「あら、あなたどこへ行くつもり」

突然の背後からの声に振り返った。いつも聞いている声。やはり恵美だった。

「篠崎さんでしたわね？」

怒っているときに見せる無理矢理に口角を吊り上げた作り笑いで

いう。

「はい、奥様ですよ。はじめまして篠崎レイと申します」

レイは組んでいた腕を離し頭をさげる。

「どうして腕なんか組んでいたのかしら」

「ゴメンナサイ。わたくしが悪いんです。貸していただいた傘の御礼にサンドウィッチをつくりまして、真田さんに食べて頂くこと誘ったんです。そして真田さんを引っ張るように腕を組んでしまいました」

「あらそう、庇ってくれていい娘ね」

レイの言葉を微塵も信じていない負の感情がふんだんにこもった口ぶりだ。

「でも、あなた」

「はい」

「腕を組んできたらあなたが断るべきじゃないのかしらね。他人からどう見られるかは大人であるあなたが判断するべきよね」

「あの、ですからわたくしが強引に真田さんを公園に……」

「子供には関係ないわ。黙っててちょうだい」

優しい口調できついことをいう。

「おまえ、そんな言い方はないだろう」

「あなたが言えた義理かしら」

「……………」

浮かれていたのは事実で適当な言い訳を探すことが出来ない。

「まあ、せっかくだし篠崎さんの好意に甘えましょうか」

「どうするつもりだ」

「篠崎さん、私たちの家にいまからいらっしやい。うちで主人にサンドウィッチを食べさせてあげて。公園のベンチなんかより家の中のほうがいいでしょ。お茶くらいごちそうするわよ。聞きたいこともございますし」

「そうさせていただきますわ」

とても断れるような言い方ではなかった。家につくまでの車内で

の10分間、誰一人何も話さなかった。

家に着くと恵美はさっさとキッチンへ向かい夕飯の支度を始めた。真田とレイは食卓に向かい合うように座っている。

「サンドウィッチ食べないの？」

包丁で野菜を小気味良く切りながら恵美が声をかけてくる。

「篠崎さん、遠慮しなくてもいいのよ」

「はい。ありがとうございます」

レイは学校の鞆から国旗の模様の入ったピンク色の布袋を取り出しそこから長方形のタッパーを出して蓋を開けた。三角形のサンドウィッチは意外に形が崩れていなかった。

「美味しそうだね」

真田はハムサンドをひとつつまむ。

「うん、美味しいよ」

場所が場所だけにレイはどうリアクションして良いものか困惑している。真田もどういふ表情をすればいいのかわからず黙々とサンドウィッチに手を付け続けるとあつという間にすべてたいらげってしまった。

「凄く美味しかったよ。これだけ料理が上手ければどんな男でもイチコロだね」

近くにゐる妻を気遣った微妙な笑顔。

「サンドウィッチくらい誰でも作れますわ。それに……」

「それに？」

「女子高ですから男の方がいませんの」

もじもじとしている。彼氏がいないだろうことは明白だ。

「いかにいかに。妻が近くにゐる状況でこんな事を考える自分を咎める。」

「おかしいわねえ」

夕飯の下ごしらえを済ませた恵美が食卓にやってきて向いの椅子に座った。

「あなた、篠崎さんは妹さんの同級生といったわよね」

「ああ」

真田は嫌な予感しかしない。何を言うつもりだ。

「あなたの妹さんは確か私立の共学に通っているんじゃないか
しら？私の勘違いかしらね」

真田とレイは一瞬目を合わせた。真田はレイに妹の同級生である
と恵美にいつていることは伝えていない。

「いや、篠崎さんは三ヶ月前から別の高校に通っているんだよ」

「昨日、はじめて会ったんじゃないの？」

恵美は真田とレイの二人が男女の仲であると疑っているみたいだ。

「あの……」

レイが小さな声で話し始めた。

「わたくしと真田さんが出会ったのは昨日が初めてです。でもわたくしは真田さんのことをそれ以前より存じあげておりました。妹さん……沙耶香さんと街で買い物をしていたときに偶然真田さんをお見かけしてお兄様であると教えられましたの」

言い訳をしてはなかなかいい出来である。プラットホームでの会話で妹の名前を教えていてよかったと真田は安堵した。

「若いつていいわね。物覚えが良くて私なんておばさんだから最近物忘れが激しいわ」

空々しいと言わんばかりの言い方をする。

「そんな、奥様はお若いですわ」

「男つて若い娘が好きなのよね。女もね年を取ると無意識に若い娘に嫉妬しちゃうのよ」

「おい、恵美。初対面の方に失礼な物言いはするな」

「あら、珍しいわね。あなたが感情的になるなんて。そうね、篠崎さんごめんなさいね」

「いいえ。気にしてませんわ」

「それであなた、どこが失礼な物言いなのかしら？」

次の矢は真田に向けてくる。

「どこが……その、おまえの物言いは俺と篠崎さんのことを疑っている物言いなんだよ」

「図星だから焦っているのかしら」

「あのな、冷静になれよ。女子高生が俺を好きになる訳がないだろ」

「あなたとわたしが出会ったのはいつかしら？」

真田と妻が初めて出会ったのは高校三年生の時だった。その時恵美は一つ後輩の二年生。そもそもお互いが若い時の話である

「その時は二人とも高校生だったろ」

「あなたはその時からさほど見た目は変わっていないわよ」

それまでのツンとした刺のある声から一転してやや甘えたトーンだ。レイに対して真田への愛情があることをアピールするように。

「そうね、そういえば思い出せないことがあるのよ。あなた、私たちが最後にセックスしたのはいつだったかしら？」

昨日激しく愛しあったばかりではないか。忘れているわけがない。

「いつだったかな」

真田もわざととぼけた。

「なに篠崎さんに遠慮しているのかしら？ 忘れるわけ無いでしょう。篠崎さんだって子供じゃあるまいしセックスなんて夫婦の義務でしょ。ねえ、篠崎さん？」

「ええ……」

蚊の鳴くような声しか出せないずにレイの顔は紅潮している。もしかして彼女は処女なのだろうか。

「昨日だよ！」

レイを挑発するかのような言動の恵美に無性に腹が立ち語気を強めて真田は事実を口にした。

「あなたは何を怒っているのかしら。ちょっと待っててね」

恵美はキッチンへ向かう。真田とレイは会話をする雰囲気どころではない。

「篠崎さん夕飯を食べていかない？」

「すみません。もうお暇させていただきましたわ」

タッパを布袋にしまい鞆に直しこんで沈んだ表情のレイは椅子から立ち上がる。真田はレイに申し訳なく謝意を示す一言を掛けたいが恵美にそれをどう捉えられるかが杞憂となり抑えざるを得ない。

「ちょっと待ってね」

恵美は帰ろうと椅子を引いて立ち上がり玄関に向けて歩を進めだしたレイの前にキッチンから駆け寄り耳元で何やらささやいた。真田は恵美が何を言っているか聞き取れなかったがレイは一瞬驚いてすぐさま頷き、顔を曇らせ玄関へ歩き出した。

「あなた、 玄関まで送ってあげて」

恵美の言うとおりに真田はレイの隣に並んで玄関までエスコートする。レイに冗談の一つでも話しかけられる雰囲気ではない。ふたりとも無言のまま玄関まで来る。

「さようなら」

別れの挨拶をするレイは涙ぐんでいた。

食卓に戻ると呆れるほど精のつく料理の数々が所狭しと卓上を占拠していた。今晚も恵美が身体を求めてくるサインであるのは明白だった。

翌日

昨夕、涙ぐんで別れたレイは今日も昨日と同じ時間の電車に乗車する為にプラットホームに立っている。レイは真田がいることは分かっているようだが昨日と違い話しかけてこない。

「レイちゃんおはよう」

真田の方から明るくレイに挨拶すると

「人違いじゃありませんの？」と返ってきた。

そんなわけない。姿形、声、仕草 どう見てもレイだ。昨日の帰り際、恵美はレイに何をいったのだろう。あのときからレイの様

子が変わだ。

「サンドウィッチほんとうに美味しかったよ」

真田はレイが自分を避けたがっているのに気づいたがわからないふりをして声をかけた。

「あの、何のことですか？ サンドウィッチのことなど存じ上げませんが……」

下手な嘘。レイは真田から目をそらし、頻繁に瞬きをする。

「この傘に見覚えはないかな」

真田は鞆から折りたたみ傘を出してレイの目の前に差し出した。

「ですから人違いだといっておりますでしょう。あんまりしつこくされますと大声を出しますわよ」

「構わないよ。僕は君が篠崎レイであることを確信している」

「わ、わたくしはあなたのことなど存じ上げませんわ」

自分はなんでこんなに彼女に執着しているんだと真田は自分に問いかける。相手が知らないというのなら出会っ前と同じはずでそのまま無視し続けば以前と同じ生活に戻るだけ。いまでも十分に幸せで特に望むこともない。レイは確かに可愛らしいがそれは妹のような可愛さだと脳では解釈していた。恵美が疑っているような下心などない……筈だった。

しかし恵美の感の方が正しかったようだ。真田はレイを一人の女性として大事に想っている。既婚者が妻以外の異性にいだいてはいけない感情を十代の少女に……。

倫理という人間が共同体を円滑に営む知恵として創った本能にのみ従って生きることにより自制をかける価値観を重んじるのならば真田の出すべき結論は一つに絞られる。

真田がレイを諦めレイと出会う前と変わらぬ日常に身と心をも戻すという選択。

この美しい少女ならすぐにも愛を捧げてくれる異性は現れるしそうなれば真田のことなど記憶の底に沈める。

「ごめん。人違いだった」

真田はレイに謝った。

「気にしてませんわ」

レイは真田を一瞥もせず、素っ気なく言う。無理に感情を押し殺しているレイを見ると真田は余計に苦しくなり真田は自分の乗車する方のプラットホームには行かずレイの隣に居続けた。そんな恨めしい自分が無様に思える。

レールの上を軽快に走る音と空気を切り裂く音を混在させてレイの乗る電車が駅に滑りこんできた。真田は依然として足を止めてレイと並んでいる。停車した電車のドアが開きホームで待っていた乗客は続々と乗り込んでいくがレイは乗ろうとしない。横からどんな他の人が割り込んで乗車する。

レイは電車が来る前と変わらず真っ直ぐに前を向いたままだ。

やがて乗車ベルがプラットホームに鳴り響くとようやくレイは電車に向かつてやおら歩き始めた。そのとき真田の中の悪魔、いや理性を越えた本能が抑えていた欲求を解放させた。

レイの右腕を真田は左手でぎゅっと握り締め自分の身体にレイを引き寄せ、そして右腕はレイの背中に回す。

「きゃっ」

レイの顔は真田のスーツの胸元にうずめられている。

「レイちゃん悪い。僕は君を愛してしまったようだ。妻のいる人間がこんなことをいうのは身勝手だとは承知している。だが、君のことが好きだ。他人は騙せても自分は騙せない。僕のことをどうも思っていないのならはつきりと言ってくれ」

真田は高校生の彼女に決断を強いることは大人として卑怯であると知っている。しかし彼女を諦めるにはそれしかないのも知っている。

「わたくしは……好きですわ真田さんのこと。でも奥さんが妊娠してるって昨日おっしゃったから諦めようと決心いたしましたの」

恵美は妊娠なんてしていない。一昨日から避妊をやめて子作りを始めたのだからありえない。

「それは嘘だよ」

「嘘？」

「妻は妊娠なんかしていない」

「どうしてそう言い切れますの？」

正直にいうような理由ではないからな。ましてや駅という人通りの多い場所で言えるわけない。制服姿の女子高生を抱きしめておきながら厚かましくも真田はそう考えた。

レイは曲げていた腕を伸ばし真田の胸に押しうずめていた顔を離れた。その顔は上気し、瞳は透明な輝きを放っている。

真田は口付けをしようとする気持ちを必死に鎮めた。レイの質感のある妖艶な唇は歳相応のものではない。誰もいない場所であったなら我慢できる自信はなかった。

レイは携帯を取り出し電話をかけた。

「おはようございます。3年8組の篠崎と申します。加藤先生はいらっしゃいますか？……そうですね、わかりました。それではお伝え下さい。昨晚より熱が出まして早く睡眠を取ったのですが今朝になっても熱が下がりませんので本日は休ませていただきます。……はい、病院には伺うつもりですのでよろしくお願い致します。それでは失礼いたしました。」

学校を休む為に携帯をかけた。

「ずる休みしてしまいましたわ」

レイは小首を傾げニッコリと微笑み真田に言った。この言葉に含まれている意味はすぐに理解できた。真田も会社に電話をし架空の親戚に病気になるてもらった。

「これで共犯だね」

「はい」

「さて、どこへいこうか？」

二人は手をつなぐ。

「あの、わたくしのわがまを聞いてもらえますか」

「僕にできることなら聞くよ」

「犬でも出来ることですよ」

「なんで犬なの？」

「昨日、奥様の前では犬のようでしたわ」

「痛いところつかないですよ」

レイはくすりと笑う。二人は駅を出てタクシーを拾った。レイは運転手には具体的に目的地を言わず。指示を出して目的地に向かう。

「ここに止まってください」

レイの指示で高層マンションのエントランスの階段前にタクシーは止まった。

「ここは？」

真田は恐らくはレイの家であろうと知りつつ言葉を投げかけた。

「わたくしの家ですよ」

「そうなんだ」

「制服姿ではなんですから着替えますわ」

「ああ、 そうだね。じゃあ僕はここで待っているから着替えてきなよ」

エントランスホールで真田は言った。

「シャワーも浴びたいですし時間がかかりますわ」

「一時間くらいなら適当に時間をつぶすよ」

「美味しいハーブティーご馳走しますから」

レイは真田の腕を引っ張る。真田も別段抵抗はしなかった

レイの部屋に入りリビングでテレビを見ながらレイの入れたハーブティーを飲んでいると彼女の身体を打つシャワーの音がかすかに耳に届く。嫌でもレイの裸体を想像してしまう。制服の上からでも分かる膨らみは妻よりも大きいことは確かだろう。

「いかにいかに。なにを考えてんだバカ」

真田は首を左右に振る。相手はまだ女子高生。こどもだこども…
…だよな？

まもなくパジャマ姿のレイがリビングにやってきて真田の隣りに

座る。いい匂いが部屋を覆う。

「レイちゃん、着替えるって言ったよね」

「そうですわ」

「パジャマからまた着替えるの？」

「えっ、パジャマに着替えたんですわ。わたくし嘘をつきましたか？」

「嘘はついていないけど」

湯上りのピンク色の頬が艶めかしい。

「そういえば、わたくしがっかりしたことがございましたわ」

「どうしたの？」

「わたくしが浴室に入る前に覗かなくてくださいっていいましたよね」

「うん、僕はずっとここにいたよ」

「どうして来てくださらなかったの？」

真田は思わず咳き込んだ。

「大人をからかうんじゃないよ」

「からかっていませんわ」

「子どもの裸に興味はないからさ」

真田は冗談めかして言った。

「そうですか、そうですよね。わたくしなんて魅力ないですよね」

レイは視線を窓の外に移す。出会った日のように雨が降っている。

そう、出会ったのはたったの2日前、でもいま見ているレイの横顔は初めて見た時より大人びている。

「そんなことはないよ」

「真田さんは優しい人。だけど優しさ故に傷つけることもあるんですよ」

レイを引き止めておきながら、部屋に上がりこんでいながら、気持ちを知っていながら真田は最後の一線を踏み越えない。

妻帯者の行為として正しくても、レイの気持ちを弄んでると受け

止められても仕方がない。優しいわけじゃない。愚かで狡いだけなんだと真田は自分を責める。レイを愛しているのは間違いない。だからといってその感情に身を任せてしまえば人ではなくなってしまう。

「レイちゃん許してくれ。僕は君を愛している。だけど妻も愛しているんだ。身勝手だと嘲笑ってくれ」

心情をそのまま吐露した。

「真田さんって馬鹿正直」

この一言で真田は救われた気がした。しかし同時についさつきレイが指摘したばかりなのに優柔不断さで彼女の心の振り子を揺らしている自分の不甲斐なさに嫌気がさし真田は打ち沈む。

「ねえ、真田さん一緒に寝てくださらない」

前置きもなく突拍子も無い発言がレイの口から飛び出した。

「それはちよつと」

流石に真田は困惑し脳で最善手の返事を探り出そうと色々な語彙を組み合わせた一条を数種類思い浮かべたがどれも喉から出せるほどのクオリティがない。レイの真意はわからない。でもひとつくらいは彼女のいうことをその通りに叶えても罰は当たらないよなどは都合よくも思っている。

「真田さん。エッチな意味ではないですわ。それとも期待しているのかしら」

レイはソファから寝室へと身を移した。

真田は勘考の末、飲みかけのハーブティーを飲み干して彼女が先に行っている寝室へと真田は向かうとレイはすでにベッドの中で横たわっている。

「真田さん入って」

タオルケットを上げ真田を促す。まるで一人で眠れない子供のようだ。真田はワイシャツにベルトを外したズボンという格好なつて促されるとおりベッドに入る。

「わたくしずっと一人暮らしで寂しかったの。もう三年になるわ。」

帰ってもいつも一人で誰も話す人もいなくて……」

レイの魅せる表情の大人っぽさと笑顔の奥に隠しきれない影の一寸を知ることができた。レイの瞳を見ると真田はどうしようもなく胸を締め付けられる。

広いベッドといっても二人では狭い。薄く広いタオルケットで二人は身体を覆い吐息の届く距離で二人は見つめ合う。

化粧をしていなくてもきれいな肌、鮮やかな唇、瞑らな瞳、ずっと見つめていたい程美しい。

命短し恋せよ乙女　そんなフレーズが頭をよぎる。

レイの貴重な人生の最も貴重な時期の最も貴重な時間とともに過ごしている。真田はこのあとに出会う彼女の特別な男性の誰よりも幸せなのかもしれない。

「きれいだよ」

つい口に出してしまう。

「でも子供なんですよ」

口を尖らせてわざとすねて見せる。

「うん、子どもだね」

真田は意地悪くいつてやった。

またレイは暗い顔をする。真田は感受性豊かな彼女のその表情を視界の正面から捉えてしまふとたまらなく、可愛すぎて抱きしめたくなる。

「あと十年早く生まれたかったですわ」

「どうして」

「だって、真田さんにもう十年早く会えていたら、わたくしと真田さんは誰にはばかることなく愛しあえていたでしょう」

「僕以外の男を好きになっただんじやないかな」

理性を保つためにわざと冷たいことをいう。彼女を突き放すといふよりも自分に言い聞かせているのだ。

「わたくしは絶対に真田さんと出会いましたわ」

レイはムキになって真田に反論する。

「絶対に解けないクイズって知ってる？」

「なんですか？」

「答えのないクイズだよ。十年早く君が生まれていたとしても僕と君が出会えていたというのはわからないことだよ」

「じゃあ、いまのほうが幸せですわね。だって真田さんと同じように居られるんですもの」

「……レイちゃん。君はいちいち可愛いことを言うね」

「好きな人に可愛いと思われることを言うのは当然ですわ」

「ごもつとも」

二人は笑った。

「ねえ。ぎゅってしていいですか？」

そう言いつつ真田がはいともいいえとも返事をしない間にレイは抱きついてきて真田がレイを電車から引き止めた時と同様に真田の胸に顔を埋める。真田もレイの背中に手を回す。布越しでもその柔らかい身体の感触は伝わってくる。

「奥さんが羨ましいですわ。いつでもこんなことできるんですもの」

「夫婦になるとそうでもないさ」

とは言っても最近はいつもこんな感じである。レイと真田が並んでいるのを目に止めてからのこの二日間は。

「わたくしなんてずる休みしないとできないのに……奥さんさえいなければ」

ワイシャツを通して温かい感触が伝わってきた。心に突き刺さる温かさ。レイの涙だ。真田のワイシャツに顔を埋めたまま彼女は動かない。

「ゴメン」

真田はそれしか言えなかった。

そして、それから無言の時間がしばらく流れると

「……スー……スー……スー……スー……」

レイは胸の中で眠ってしまっていた。真田苦笑してはゆっくり彼

女の身体を枕の位置に合わせて寝かせる。それから真田もレイの寝顔を見ながら眠りについた。

「さーなださん。起きてください」

「……うん……おはよう」

ベッドで気愈く上半身を起こす。はてここは一体何処だっけ？

眠気まなこをこすりまだ起き切れていない脳みそを徐々に起動していく。

「真田さん7時ですよ」

この若い声で僕に話しかける娘は確かレイだな。と、まだまだ重たい瞼で視覚に頼らなくとも分かる。

段々と今日の記憶が呼び起こされるとレイの家に来て眠りに就いたところまで思い出した。

「真田さん。起きてください」

真田が横に視線を向けるとエプロン姿のレイがベッドの横に立っている。

「レイちゃん、おはよう」

「真田さん寝過ぎですわ。わたくしは2時に起きてずっと一人だったんですから」

お姫様はご機嫌な斜めのご様子だ。

「すまない。ちょっとこここのところ疲れてて」

「どうせ奥様と仲良くし過ぎたんでしょう」

正解だけどそうだとは言えない。

「せっかくデートしようと思ったのに残念ですわ」

「起こしてくればよかったですよ」

「だってすごいイビキをかいていたんですもの起こせませんわ」

「埋め合わせはきつとする」

「ほんとですわね」

レイはパツと明るくなった。彼女の表情は一体いくつあるのだろう。喜びの表情でも見るたびに違う。

「取り敢えず今日の罰として夕飯を食べていってください」

むしろそれはご褒美ではないか。一人暮らしとあって料理は上手だった。

銀色の掛時計を見ると8時半5分前。

「美味しかった。ありがとう今日はもう帰るよ。妻に疑われることは避けないとね」

「はい。今日は嬉しかったですわ。また連絡いたしますわね」

家に帰った真田は内心ビクビクしていたが恵美は何も言わなかった。会社からも電話がなかったのだらう。食卓にはまた豪華な食事がテーブルを彩っている。

「はあ」

恵美に聞かれない為にトイレでため息を付き無理をしてその料理を平らげた。

三ヶ月後

真田は約束の埋め合わせとしてレイとテーマパークでデートをして以来、その一度で別れることなく、週に一、二度デートをしている。動物園に行ったり映画に行ったりライトアップした夜景を楽しんだ後にホテルで食事をしたり、恋仲の男女らしい付き合いをしているがそれでもプラトニックな関係は崩していない。たまにレイからのおねだりで一緒にベッドで寝るが間違いは犯していない。もっとも恵美から体力を吸い取られているのが大きな要因でもあるが。

昨日はサッカーの代表戦を見に行った。会場の雰囲気に乗って彼女もはじけていた。それもまた可愛いく楽しんでくれて嬉しかった。

朝起きて、朝食をとりながら新聞のスポーツ欄を見てみると昨日の選手たちの躍動が呼び起こされる。

「あなた」

「なんだい」

「ちゃんとこつち見て」

「ん……なんかあったのか？」

恥じらいつつ、もじもじしている恵美を見るのはいつ以来だろうか。

「昨日病院に行ったら”おめでた”ですって」

「やったな。おめでとう」

真田は恵美を抱きしめてお腹に耳を当てる。

「きこえまちゆか？ぱぱでちゅよ」

「もう……バカ」

恵美は嬉しそうだ。これが母になった余裕なのか笑顔が柔らかく朗らかになっている。

しかし、これで真田は決断をしないといけない。たとえプラトニックな関係だとしても父親の責任としてレイとはいままでの関係を清算しなければならぬ。

「レイちゃん、妻が妊娠をした」

駅のプラットホームで真田はレイに恵美の妊娠を告げた。彼女はそれが何を意味するかをすぐに悟ったようでほんの一瞬だけ視線を下げたあといつもどおりの篠崎レイに戻り

「おめでとうございます」

といった。表面上は純粋に祝福してくれている。

「それでね」

「もう会わないようにしましょう。そう言いたいんですわね」

「うん……」

「わかりましたわ。私達の関係はいつまでも続くものじゃないと分かっておりますましたもの」

レイは携帯を取り出しの目の前で真田の携帯番号とメルアドを消去した。

「真田さんも」

真田もレイの携帯番号とメルアドを消した。

「じゃあ、さようなら」

そう言っってレイは真田の隣から去って行く。

その次の日から駅でレイと会うことはなくなった。恵美のお腹が大きくなるに従って真田の中からレイは存在は少しずつ小さくなっていた。

2年後……

無事に生まれた娘はよたよたと立って歩くようになり、言葉にはなっていないがちよつとした声を発するようになっていた。

「パパ、今日はお父様が来るの知ってるわよね」

「うん、知ってるよ玲子に一番メロメロなのはお義父さんだもんね」

「今日はお父様が一人お客様を連れて来るんですって」

「誰だろう？ 君の口ぶりではお義母さんではないようだけど」

ピンポーン……チャイムが鳴る

「あら、もう来たみたい。あなた出てきて」

「はい、了解」

ドアを開けるとスーツ姿のお義父さんが満面の笑みで立っている。

「お義父さん、おはようございます」

「うむ。健治君久しぶり」

「どうぞ、あがってください」

「さーなださん」

「えっ……」

聞き覚えのある決して忘れるはずのない声。義父の後ろから大人の女性に成長したレイがひよっこりと顔を出した。真田は心臓が口から飛び出しそうになる。

「あなた、なにしてるの？早く上がってもらって頂戴」

「ど、どうぞ」

「お邪魔する」

「お邪魔しますわ」

二人をリビングに通す。義父の横にレイが座っており、テーブルを挟んだ向かいに真田がひとり座っている。玲子は義父に抱かれご機嫌だ。

恵美が麦茶を持ってきて真田の隣に座り全員が揃った。

「恵美、わしから言おうか？」

玲子の顎を撫でながら恵美に話しかける。

「私が言いますわ。健治さんゴメンナサイ」

いきなり恵美と義父とレイが頭を下げた。真田は事態が飲み込めない。

「あのね……あなたそこにいらつしやるレイさんは実は親戚なの。結婚式にも出ていただいていたのよ」

どつりで見ることがある気がしたわけだ。真田は長年の疑問がこんな形で解けるとは思いもしなかった。

「それでね、怒らないでね？ お父様がね孫の顔が見たくなってね、その……あなたに刺激を与えるためにレイさんをあなたに近づけたの。実際レイさんに会った日の晩はあなた激しかったし」

義父の目の前で閨の感想など言わないでもらいたいものだがすべては義父が計画したことだったのか。レイとは恵美にばれないようにと警戒して会っていたのに筒抜けだったわけだ。

「健治くん、悪いことしたね」

「いいえ」

義父は地元の名士で一人娘の恵美で同じく一人っ子の真田との結婚には反対していた。だから真田は義父に逆らえない。

「そうか。健治くんは懐が深いね。次は男の子を頼むよ。わしも引退を考えたいのでな」

「大丈夫ですわ。今度の子は男ですって」

恵美は二人目を妊娠している。一昨日病院に行つて確認したばかりだ。

「そうか。うむ我が家は安泰じゃ」

その後、3時間過ごしたが真田は会話の何もかもが上の空であった。レイとのデートは楽しかった。でも全て演技だったのか？

どうせ俺なんてモテないよな。と自虐的になる。

帰り際、義父が玄関を出た後にレイは真田に

「健治さんがその気でしたらわたくしはその……初めてを捧げましたわ。いまも純潔は守ってありますわ」と耳元でささやいたが真田は信じていいものかもうわけがわからない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2248t/>

レイ

2011年5月15日15時55分発行